

# 京極読書新聞 <第92号>

発行日 平成29年9月1日(金)  
京極町生涯学習センター湧学館

## 平成29年度 「職場体験学習」を終えて



8月24日(木)～25日(金)、京極中学校の生徒2名が「職場体験」を行いました。  
この2日間をふり返って、写真とインタビューで紹介します。



京極読書新聞は  
毎月1日発行予定です

向田 朱羅さん (2年)  
吉田 琉晟さん (2年)



▲初日。まずは湧学館・図書館について学びます。図書館の本は大きく分けて10個の区分に分けられていて、これが分かると本が探しやすくなります。



▲本の修理体験です。のどが割れてしまった本に、少しずつのりをつけて直します。翌日、本は直ってまた書架に並びました。



▲京極小学校の蔵書点検です。小さな機械でひたすら本のバーコードを読み込んでいきます。約2時間の作業、大変お疲れさまでした。

——二日間にわたる職場体験学習お疲れ様でした。お二人には、図書館の役割や種類のほか、図書の分類による本の探し方など、図書館の基本をまずお話させていただきました。さらに、図書館の実際の仕事をたくさん体験してもらいましたね。たとえば、朝の開館準備やカウンターでの貸出、返却の手続き、また、返却された本を書棚に戻したり、新しい図書と雑誌の整理や、傷んだ本の修理も手伝っていただきました。そうして今回は、お二人のオススメ本を集めた展示コーナーを作ってもらったり、京極小学校図書室の蔵書点検もしていただきました。図書館の仕事をたくさん体験してもらいましたが、そのなかで、印象に残ったことは何でしたか？

向田 湧学館の図書室を利用していましたが、全く知らない作業がたくさんあるんだなと思いました。また、京極小学校の蔵書点検が一番たいへんでした。

吉田 一つ一つの細かい作業が多いと思いました。本の修理や返却された本を書棚に戻すときは特に気を使いました。

——特に面白かった仕事は何でしたか？

向田 展示コーナーの本を選んだり、POPを作るのが面白かったです。

吉田 POPづくりが一番面白かったです。

——図書館には本やいろんな設備があるほか、仕事をする職員がいて、本を借りる利用者がいますよね。図書館には様々なものや人が関係していますが、図書館全般について何か感想はありましたか？

向田 本棚に分類や作者のアイウエオ順に本が並んでいますが、本の分類や並べ方には意味があるんだということを知りました。

吉田 本棚の本の並び方が左から右へ進んでいくのが面白かったです。

——書棚の本の並び方には、図書館独特のルールがありますよね。本は上から下へ、左から右へ、数字は小さい数字から大きい数字の順に並んでいます。そのほかに何かありますか？

吉田 新しい本を置く新着図書のテーブルや、テーマに沿って展示するコーナーが、とても分かりやすくいいと思いました。

——湧学館ではもっと多くの中学生の皆さんに、図書館を利用してもらいたいと考えているんですが、ここでお二人に読書についてお聞きしたいと思います。普段、本を読みますか？

吉田 本はあまり読みませんが、マンガは読みます。

向田 私もあまり読みません。読書感想文を書く時に読むぐらいです。

——お友達はどうですか？

向田 人によって読む人はよく本を読んでいると思います。

——図書館は利用しますか？

吉田 部活で忙しくてなかなか利用できません。土日も練習があるときもありますので。

向田 私も部活で利用できません。ほとんどの人が何かの部活をしています。

——今日は中学生が部活で忙しくて、なかなか図書館を利用できない実態を教えてくださいました。そんな中学生たちに向けて、図書館がどんなサービスを提供することができるのか、大きな宿題が残されたように感じました。向田さん、吉田さんには二日間にわたり、図書館の職場体験をしていただき、またお手伝いいただきましてありがとうございました。



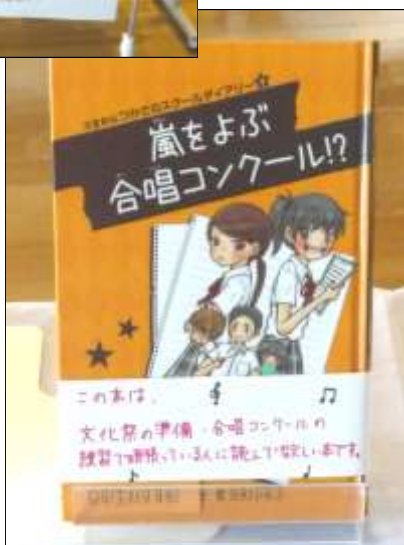
▲二日目。開館までの30分間で準備を整えます。届いた新聞の処理や返却ポストに返された本の返却など、やることは様々です。



▲毎週届く新しい本が新着図書コーナーに並ぶまでには、巻いてある帯を切って、内容の紹介になるところを貼り付ける作業などがあります。



▲返却された本は、確認後書架へ戻します。間違っ  
て戻すとどこにあるか分からない「不明本」になっ  
てしまうので要注意です。



▲2人のおすす  
め本・お気に入  
り本を集めて展  
示コーナーを作  
りました。本は  
貸出もできます  
ので、ぜひお  
立ち寄りくださ  
い。

## “壇の浦合戦”を考える(1) —平家の敗因をめぐって—

〈『平家物語』を読む会〉 村山 功一

はじめに

〈平家物語を読む会〉も、開講以来八年を経てやっと〔巻十一〕「鶏合壇浦合戦（とりあわせだんのうらかっせん）」の章を読み終えました。

『平家物語』以下『平家』と略）の後半は、文字通り合戦に次ぐ合戦を描きますが、そのクライマックスが、この壇の浦の合戦です。

源義経の巧みな作戦、有名な“八艘跳び”の妙技、対する平家随一の勇将能登守教経の奮戦、最期まで冷静沈着に敗色濃い平家軍を指揮統率した智将新中納言知盛の活躍など、『平家』の軍記物語としての側面を余すところなく描いて、まさに圧巻です。

それはさておき、以下この合戦で海戦を得意としたはずの平家が、なぜあっけなく敗れたのか、その敗因は何であったのかを考えてみることにします。平家の敗因に関しては、昔から多数の説が主張されていますが、その主なものを紹介しつつ、若干の私見をのべてみたいと思います。



その前に、壇の浦の合戦までの経過を簡単におさらいしておきましょう。

平家打倒の兵を挙げた木曾義仲は快進撃を続け都に迫ったので、平家一門は寿永二（一一八三）年七月二十四日安徳天皇とともに都を脱出（〔巻七〕〔一門都落〕）し、西国（四国・九州）で再起を図ろうとします。この間義仲と鎌倉の頼朝（義仲とは従兄弟同士）が不仲となって、頼朝の命を受けた範頼・義経（二人とも頼朝の異母弟）によって義仲は討たれてしまいます。この源氏同士の内紛に乗じた平家は勢力を挽回し、福原（現神戸市）に進出しますが、寿永三（一一八四）年二月七日の”一の谷の合戦”に敗れ、再び四国の屋島に逃れました。元暦二（一一八五）年二月十七日、嵐を衝いて来攻した義経の奇襲（〔巻十一〕〔勝浦・付 大坂越〕）によって、ここも放棄して長門の国、彦島（現山口県下関西端）に集結。そして一ヵ月後の同年三月二十四日、運命の壇の浦合戦を向かえる…というのが、ごく大まかな流れです。

さて、平均的日本人の殆どが一度は聞いたり読んだりしたことがあるだろう、といわれている“壇の浦合戦”ですが、その真相はやはり謎の部分が多いのです。“野戦の源氏”“海戦の平家”といわれながら、その海戦にあっけなく敗れた原因は何だったのか、という謎もその一つです。今回はその平家敗因を巡って進めて行きます。（以下次号）

### 発行

京極町生涯学習センター湧学館  
〒044-0101 京極町字京極158番地1  
TEL 0136-42-2700(代表)  
FAX 0136-42-2032  
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください  
<http://lib-kyogoku.jp>

